［思文閣出版，〒605-0089 京都市東山区元町355，TEL. 075（751）1781，2014年11月，A5判，186頁，2,500円＋税］

藤倉一郎 著
『血圧測定の父――ニコライ・コロトコフ』

血圧測定は医療や保健の現場で日常的に頻回に行われている．カフ・加圧器・圧力計よりなる血圧計と聴診器により簡単に行われ，循環生理状態が容易に把握されるようになっているが，その歴史は必ずしも古いものではないことを認識させられる本が出版された．

日本医史学雑誌　第50巻第3号（2004年）に『ニコライ・コロトコフ―聴診による血圧測定の発見』を寄せた著者が本をまとめられた．アジアとヨーロッパの戦争の時代を軍医として戦場にあることの多かったコロトコフが，聴診器による血圧測定の可能性と戦陣医学の中で其の価値を発見した歴史を丹念に紹介している．Nikolai S. Korotkoff（1874～1920 ロシア）の日本語で読める伝記として章立てを含めて紹介する．

1. 血圧測定はどのようにされてきたか
2. ニコライ・コロトコフの聴診による血圧測定の発見
3. 医師になるまで
4. ロシアを巡る国際状況
5. ロシア国内の反乱と革命
6. 北清事変と日露戦争へのコロトコフの従軍
7. コロトコフ音の発見
8. ペテルブルグ陸軍病院における研究
9. 悲運の日々
10. 幸福のひととき
11. 戦争と革命の中で
12. 血圧測定の普及とその後
13. おわりに

血圧のトランスジューサーによる直接測定がされるようになり循環生理学の進歩は，コロトコフ音の各相の聴き分けの意味などを医家に要求しない時代になってきた．コロトコフの名前もそれほど医療者の口に上らないようになってきている．しかしロシアの志願軍医として，義和団の乱，日露戦争，第一次世界大戦に従軍し，四肢の切断手術の適応を考える中で血圧測定の実際を確立したロシアの外科医のことは記憶されて続けられてしかるべきことだと考える．

戦争に明け暮れた20世紀前半のロシアにおいてその歴史に一志願軍医として働き，肺結核に冒され死す，幸せとはいえなかったコロトコフの生涯を知ることができたことは，診療室で血圧測定を患者とのコミュニケーションの手段として，患者の幸せのために測定している者にとり感謝すべき発見にかかわる本であると考えます．

（渡部　幹夫）

［近代文藝社，〒112-0015 東京都文京区目白台2-15-2，TEL. 03（5395）0869，2013年11月，四六判，114頁，1,000円＋税］